

令和元年度 卓越した技能者の表彰 代表的な技能者について

(目次)

第 1 部門 こんどう 近藤 ゆきお 幸男 (鋳物工)	第 11 部門 たまる 田丸 ゆうじ 雄二 (造園工等)
第 2 部門 はたぶ 幡歩 ひろまさ 博正 (研ま盤工)	第 12 部門 さとう 佐藤 ともあき 友昭 (石彫工)
第 3 部門 きよかわ 清川 としお 敏男 (化学めっき工)	第 13 部門 えんどう 遠藤 きよし 清 (木製建具製造工)
第 4 部門 くろさき 黒崎 あつお 敦男 (産業用機械組立工)	第 14 部門 おおえ 大江 かつゆき 克之 (和生菓子製造工)
第 5 部門 いとう 伊藤 まさひろ 正博 (プリント基盤組立工)	第 15 部門 やまなか 山中 えみこ 恵美子 (美容師)
第 6 部門 はしば 波柴 かずえ 主計 (自動車板金工)	第 16 部門 こんどう 近藤 ふみお 文夫 (天ぷら料理人)
第 7 部門 やまざき 山崎 まさじ 昌二 (織布工)	第 17 部門 おの 小野 あきお 昭夫 (家具類内張工)
第 8 部門 こじま 小寫 みえこ 美恵子 (婦人・子供服注文仕立職)	第 18 部門 たかはし 高橋 よしや 良八 (広告美術工)
第 9 部門 かわしま 川島 かずお 一男 (建築とび工)	第 19 部門 むさしかわ 武藏川 よしのり 義則 (漆器加飾工)
第 10 部門 むろい 室井 みつあき 満昭 (左官)	第 20 部門 はやふじ 早藤 ひろふみ 博文 (クリーニング工)

※ 職業部門、氏名（敬称略）及び職種を記載。

1 ^{こんどう}近藤 ^{ゆきお}幸男 氏 (88歳) 鋳物工【近藤鋳造所 TEL:03-3802-0533】

《名簿番号2》

◆世界に誇る「東京アンチモニー工芸品」の鋳造技法、「戻し吹き」の数少ない承継者

東京都推薦

経済産業大臣指定の伝統的工芸品「東京アンチモニー工芸品(※1)」等の貴金属製品を、「戻し吹き」技法で鋳造する職人である。アンチモニー産業は、明治初期に東京の地場産業として技術が確立され、140年以上の歴史を有し、世界に類のない伝統的な鋳造技法を引き継いでいる。多数の鋳型を取り扱う中で培ってきた経験と感覚により、各部分の温度差を見極めながら最終的な仕上がりを想定し、絶妙なさじ加減で均一の厚みを保つ技能は業界からも一目置かれている。(※1) 鉛(Pb)・アンチモン(Sb)・錫(Sn)の合金であるアンチモニーを原料とした鋳物製品。

◆知識と技術を活かし、アンチモニー業界の発展に大きな貢献

幼少の頃から、アンチモニー製品を製造する父親の背中を見て育ち、中学校卒業後に本格的に修行を開始した。

アンチモニー産業は、海外輸出により戦後の日本経済を支えていたが、1970年の地金の急騰、1971年のニクソンショックに伴う急速な円高の影響を受け輸出が減少。その後は国内でトロフィーやメダル製品に活路を求めるも市場は縮小傾向であった。そのような中、アンチモニーと錫の両製品に精通した「戻し吹き」職人として、業界再興の一手でもある新素材「エテナ(※2)」の技術開発協力を行う等、業界の発展を下支えした。

「自分の技術でお客様が喜ぶ顔を見ることが何よりも嬉しい」と語り、他の職人が匙を投げる複雑な鋳造依頼も積極的に受け入れ、技術向上に日々邁進している。(※2) 銀製品の光沢の色合に近づけた鋳造錫合金。鉛を一切含まないため、環境や健康に対する安全性が高い等の特性を持つ。

◆作業風景写真



【「戻し吹き」のうち、鋳型への流し込み作業】

◆作品写真



【仏像(構造が複雑な製品についてはパーツ毎に作成)】

2 ^{はた ぶ ひろまさ}
幡歩 博正 氏 (56歳) 研ま盤工【(株) ミットヨ 広島事業所郷原生産部 TEL: 0823-84-4477】 《名簿番号 1 1》

◆機械加工と機械設備の保全・仕上げ・組立の両分野に精通

広島県推薦

入社以来 36 年間、精密測定機器の製造に必要な専用機・治具・金型の高精度部品加工、仕上げ及び組立に従事し、各種部品加工の高精度化に寄与してきた。あらゆる工作機械の構造や特性を熟知しており、機械加工と機械設備の保全の両分野に精通している。

また、技能検定委員のほか、社内訓練校での後進への指導など、技能者育成にも大きく貢献している。

◆機械の特性を知ったうえで高精度加工に挑む

入社後、製造ラインで使用する専用機・治具・金型を製作する部署に配属された。技能五輪全国大会（機械組立て職種）出場により、向上心が芽生えたことが転機となり、技能の領域を機械加工にも広げ、機械組立てと機械加工の両職種で技能検定 1 級に合格するまでになった。

主力製品の性能に関わる、加工用機械（研削盤）の高精度化の課題では、目標とする精度が出ずに苦労した。しかし、諦めることなく、研削盤の機械特性を調査し、加工時の温度変化や研削液の種類を考慮した設備調整等を施すことにより、その精度を大幅に向上させることに成功した。

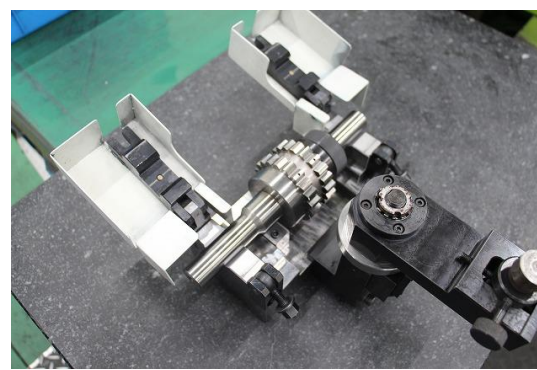
「真の技量は、「加工するものに対して、どこまで機械設備を活かせるか」により問われる」と語り、現在も技能向上に挑戦し続けている。

◆作業風景写真



〔平面研削作業〕

◆作品写真



〔マイクロメータ部品用ラップ治具〕

3 ^{きよかわ としお}
清川 敏男 氏 (61歳) 化学めっき工【清川メッキ工業(株) TEL:0776-23-2912】

《名簿番号24》

◆無電解めっき接合技術の第一人者 / 半導体のめっき処理工法開発により携帯電話やコンピューターの小型化に貢献

福井県推薦

無電解めっきによる接合技術開発・製造に長年従事し、特に無電解 Ni-Au（ニッケル-金）めっきの接合に卓越した技能を有している。当人が確立した様々な工法は、携帯電話やコンピューター用のプリント基板の大量生産・標準化を実現し、現在ではハイブリッド車のモーター制御用のパワーデバイスをはじめとする多くの電子機器で使用する半導体のめっき処理に適用され、業界の発展に大きく寄与している。

また、後進への指導に加え、当人が持つ技能をデジタル化する取組を通じて、技能の継承に貢献している。

◆「お客様に「できない」と言わない」教え

入社当初、主に新規開発案件を任されたが、お客様の要望と本来のめっき特性から相反する問題点が多く、開発が進まない事が度々あった。

諦めかけた頃に上司（現会長）に相談したところ、「お客様に「できない」と言うな」とよく教えられた。最初はよく理解できなかったが、難しい開発案件が解決し、お客様の喜んだ顔を見た時にその言葉の意味を理解した。その後は、「できないと言わず、できるまでやってみる」を信条に仕事に邁進してきた。

「今日の携帯電話・コンピューターの小型化やハイブリッド車制御の安全性確立に微力ながら貢献できたと思う」と謙虚に語り、「若い社員にめっきの面白さを教えていき、私自身も何事にも挑戦していきたい」と、日々業務に精進している。

◆作業風景写真



【接合強度対応無電解 Ni-Au めっきの仕上がり状態確認】

◆作品写真



【パワーデバイス接合強度対応無電解 Ni-Au 自動ライン】

◆ナノメートルの領域で仕上げる技能を有する機械組立の第1人者**栃木県推薦**

高精度な加工設備の製作における仕上げ技能に卓越しており、超高精度四直角マスタ（基準器）の製作においては、外周面四面と側面二面の真直度と平行度を500mm以下、直角度は90度±0.007度以下に仕上げ、機械加工では不可能な領域での仕上げを実現した。

また、社内最高精度の高精度測長機（ナノマスタ）を製作し、タイ国計量基準局への設置・調整を行うなど、海外においても測定の合理化推進に多大な貢献をしている。

◆要求精度を満たす組立の為、試行錯誤の連続

高校の時から物を造る事に思い入れがあり、ミットヨに入社。精密機械を製作する部署に配属された。高校で学んだ電気分野とは異なる、機械加工がメインの部署であり、当初は先輩の仕事を横から見たり聞いたりしていたものの、次第に、時間を作っては自分が納得するまで作業を続けるようになった。

高精度な加工設備の組立仕上げにおいては、部品単体の精度はもとより、各工程で要求される精度を満たし、かつ、その積上げを行うことが「必要不可欠」と語る。このため、組立仕上げに求められる多くの技能士資格を取得。試行錯誤を繰り返しながら技能を磨いた結果、ナノメートルの領域までの仕上げ技能を身に付け、タイ国の計量基準として活躍する最高精度の測長機の製作及び設置・調整に貢献するまでになった。

現在も精密測定機の生産設備で、専用工作機械組立作業と保全に従事。自身の技能研鑽とともに、後進の育成に精進している。

◆作業風景写真**[高精度測長機部品のラップ仕上げ]****[精密機械摺動面のキサゲ作業]****◆作品写真****[超高精度測長機]****[ノギス専用研削機]**

5 ^{いとう まさひろ}
伊藤 正博 氏 (51歳) プリント基盤組立工【(株) デンソー TEL: 0566-73-2616】

《名簿番号 4 1》

◆設備製作をプリント基板から変えてきた第一人者/世界に挑戦する若年者を育成

愛知県推薦

生産ラインで使用される専用機やロボットなど、各種設備に組み込まれるプリント基板や試作基板の製作・調整に卓越した技能を有している。

特に、高品質なものづくりに欠かすことのできない検査装置の製作においては、生産ラインの自動化により生じていたノイズへの対応として、プリント基板の部品配置や配線経路の研究を通じて、その排除に成功するなど、設備製作を通じて高品質な製品の量産化に貢献してきた。

現在は、デンソー全社の技能五輪訓練の監督として、技能五輪選手を育成すると共に、IT やロボットなど新たな分野の人材育成にも挑戦し、社内外を問わず若年者の育成に貢献している。

◆設備づくりを通して、お客様に製品を届ける

デンソーに入社し、技能五輪全国大会（電子機器組立て職種）第1位の実績を残した後、社内の生産ラインで使用される専用機の制作部署に配属された。担当は電気配線や制御だったが、「設備の機構・構造を知らずに、配線も制御も成し得ない」と考え、設備全体を幅広く勉強した。

「設備を作っていると思っているうちは半人前、設備づくりを通してお客様に製品を届けるのが真の設備屋」との思いで、設備の電気装置製作のエキスパートとして、製造現場の社員と共に数多くの改善に取組み、製品の品質向上とコスト削減に貢献してきた。

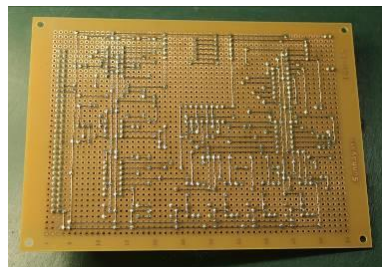
技能五輪への取り組みの中では、日本一、世界一の先にある「お客様に製品を届けるための人づくり」を目指し、人材育成に全力で取り組んでいる。

◆作業風景写真



【試作基板のはんだ付け作業】

◆作品写真



【左：試作基板（すずメッキ軟銅線による配線） / 右：競技用プリント基板】

6 ^{はしば かずえ}
波柴 主計 氏 (52歳) 自動車板金工【トヨタ車体(株) 富士松工場 TEL:0566-36-2121】

《名簿番号48》

◆設計・デザイン要望を高精度で仕上げる面出し技能

団体推薦

入社以来30年以上、試作車両の板金工程に従事し、ハンマーによる打出し・絞り技能と外板仕上げ技能を駆使して、高難度の加工を行うことができる。
特に、設計・デザイン要望に応じた高精度な面出しを実現するための当て盤ならし技能及び灸すえ技能に卓越しており、幾多の車両を試作製造し世に送り出してきた。

また、技能五輪全国大会出場の経験を活かして、熟練されたその高度な技能と知識を後進に伝承し、若年層の技能向上に尽力している。

◆夢を形に積極果敢に挑戦し、お客様の記憶に残るモノづくり

トヨタ車体に入社後、3年目に技能五輪全国大会(打出し板金職種)の選手として出場を果たす。図面通りの製品を限られた時間、工具及び材料の中で造り上げる事が「刺激的だった」と語り、訓練では鉄板を絞る順番や使用する工具の工夫を自ら行うなど、充実した時を過ごした。

その後、試作車両の製作業務に従事。ベテラン達の高度な技能を目前にして、「熟練技能を早くマスターする事が目標となった」。

現在受け持つ荷役省力車や福祉車両の試作車組付け業務では、アルミやカーボンなどの新素材の加工に苦戦したものの、習得してきた熟練技能を発揮し、課題を解決してきた。「今後も「挑戦」する事を大切にし、新しいことに目を向けて後進達と共に成長していきたい」と、業務に邁進し続けている。

◆作業風景写真



〔試作部品製作(面出し作業)〕



〔後進指導(打出し板金)〕

◆作品写真



〔左：B×トラック / 右：丹頂鶴(いずれも板金手加工による作品)〕

7 ^{やまざき}**山崎** ^{まさじ}**昌二** 氏 (83歳) 織布工【(株) 山崎ビロード TEL:0778-43-1333】

《名簿番号53》

◆ベルベット生地のカジュアルファッション分野進出を先導 / ファッションデザインに新風

福井県推薦

ポリエステルやレーヨン、和紙や絹などを織り込んだベルベット生地製造に卓越した技能を有している。革新的な技術により生み出される生地は世界的ファッションデザイナーに採用されるなど、ベルベット生地のカジュアルファッション分野進出を先導し、作品はニューヨーク近代美術館に永久保存されている。また、機械の調整方法や生地の製造について、学生や企業を対象とした講演や実技指導を行うなど、後進の指導・育成にも貢献している。

◆カジュアルベルベットに無限の可能性を吹き込む

中学を卒業後、羽二重織物（日本を代表する絹織物）の2社で修行。独立にあたり、「羽二重なら織機8台、ベルベットなら織機4台で食べていける」と言われ、納屋には4台分のスペースしかなかったことから、ベルベットの道に入った。

独立当初は、フォーマル用のベルベット生地を受託生産していたが、「婦人ファッション用のベルベット生地を織ってほしい」との話が転機となり、カジュアル分野へ進出することとなった。有名ブランドとの取引も始まり、「この世にないものを短納期で求められた」と苦労したものの、試行錯誤した「未完の完成品」がパリコレクションで披露され、広く世に知られることとなった。

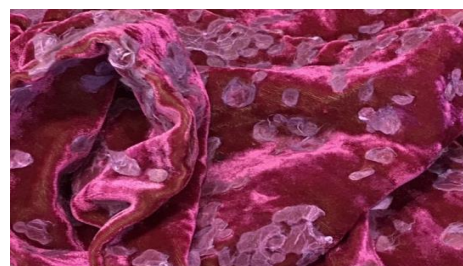
カジュアルベルベットは「68年間探求し続けても幅広く、奥深い」と語り、「生涯開発を続けていく」と、今も新たなベルベット生地を探求している。

◆作業風景写真



〔織機のよこ糸調整作業〕

◆作品写真



〔左：和紙ベルベット / 右：ウェーブプロセスベルベット〕

（ニューヨーク近代美術館永久保存作品）

8 ^{こじま}小^{みえこ}島 美恵子 氏 (76歳) 婦人・子供服注文仕立職【アトリエミエコ・小島洋裁教室 TEL:048-976-0888】

《名簿番号60》

◆注文服仕立職人として

団体推薦

婦人服の仕立職人として、伝統的なオーダーメイド仕立てにより美しいシルエットを実現する縫製技能に卓越し、技能グランプリにおいて最高峰の内閣総理大臣賞を受賞している。イブニングドレスの仕立て技能にも卓越し、その優雅な気品ある作品は、コンクールにおいて数々の賞を受賞し、高い評価を受けている。

また、婦人服製作の実技指導等を通して後進の指導、育成に尽力し、技能伝承にも貢献している。

◆自分の個性に合った服を着る楽しさ、作る楽しさを伝えたい

滋賀県で生まれ育つ。母親がとても器用であり、和服・洋服の仕立や編物など、いつも手を動かしていたのを見ていて、自然と洋裁の道に進んだ。

18歳で洋裁店の縫い子として修業に入り、先輩たちの仕事を見ながら基礎から全てを修得したが、「縫うことが好きで飽きる事が無かった」。

当時は、まだ注文服が主流の時代であり、「技を磨く機会に恵まれていた」。その後、主流が既製服に移り、注文服の需要は次第に減少していく。「簡単に早くできる事が良い事とされ、注文服仕立の奥深い技術を習得する場が減ってしまった」と、時代の変化を語る。

「注文服仕立とは、着る人の個性に合わせ、より綺麗に見せる事」と語り、「若い人達に良い服をきちんと仕立てる技と、それを着る喜びを伝えていきたい」と、現在も技能継承に日々努力をしている。

◆作業風景写真



【手作業の様子】

◆作品写真



【イブニングドレス（2011 全日本洋裁技能コンクール 経済産業大臣賞受賞作品）】

9 かわしま かずお
川島 一男 氏 (71 歳) 建築とび工【(有)川島組 TEL:029-831-7764】

《名簿番号 6 9》

◆**曳家工事の豊富な経験・蓄積した勘と豊かな知識を持った第一人者 ～限りある資源を守るために～**

茨城県推薦

土地区画整理や道路拡張時における住宅をはじめ、文化財・寺社仏閣などの補強及び曳家工事（建築物を解体することなくそのままの姿で移動させる工事）等に長年携わり、特に、一つとして同じでない現場において、建物の構造に合わせた施工方法の見極めの技術力に卓越している。

これまでの施工実績は 200 件を超え、他業者からも一目を置かれるとともに、高校生の職場体験の受け入れ等を通して、技術の継承・伝承にも尽力している。

◆**曳家伝統の技の継承と曳家の魅力の伝承**

鳶職人の長男として生まれ、先代の組頭の「仕事は見て覚えろ」という教えの下、18 歳で家業を継ぎ、曳家工事の大変さ、厳しさを身をもって体験した。

曳家工事では、家を持ち上げる段取りが重要であるが、作業の多くに経験やカン・コツだけではなく、肉体労働が求められる。しかし、「安心・安全を届けるため」と、泥だらけになりながら家の下に潜って柱にレールや H 鋼を縛り付けたり、ジャッキで重い家を持ち上げたりする作業に手間を惜しまない。

東日本大震災時に、地盤が液状化で沈下した家を持ち上げ、新たな基盤へ移動し復元した時の、施主からの驚きと感謝の言葉は「今でも忘れられない」。

苦労も多かったが、「続けてきてよかった」と語り、現在も若い鳶職人の指導・育成を通して技術・技能の継承に尽力している。

◆**作業風景写真**



【**揚げ家工事**（家を持ち上げる段取り作業）】

◆**作品写真**



【**曳家工事**（家を移動させる為のレールを敷設）】

10 ^{むろい みつあき}
室井 満昭 氏 (77歳) 左官【(有) 室井左官工業 TEL:0242-24-7413】

《名簿番号 7 3》

◆なまこ壁・漆喰壁・腰壁の見事な技能で文化財修復にも貢献

福島県推薦

長年左官業に従事し、伝統的な工法を用いながら独自の材料配合で耐久性・耐火性・耐水性を保ち美しく仕上げる「なまこ壁」や、漆喰で細部まで丁寧に仕上げる「家紋作り」の技能に卓越している。その高度な技能を活かし、国の重要文化財の修復工事を数多く手掛け文化財維持に努めるとともに、日本古来の技法伝承と業界の発展向上に尽力している。

また、技能向上講習会の指導にあたり、後進技能者の育成指導にも貢献している。

◆日々感謝しながら仕事を楽しむ

父親が左官業を営んでおり、子供の頃から父親に連れられ何度も現場を見に行っていた。そのうち「自分でもやってみたいと思って」左官の道に入り、60年以上になる。

左官の仕事について、「とても奥深く、根気のいる仕事であると同時に、やりがいのある仕事であり、仕事を始めると時間を忘れてしまうときもあるほど、とても楽しい」と語る。

6人の弟子を住み込みで雇用し、指導の仕方に悩んだ時もあったが、現在ではその弟子が第一線で活躍する様子を見て、「とてもうれしく思う」。

現在も、日本古来の伝統技法を若年技能者に伝承しながら、日々邁進している。

◆作業風景写真



【こまいかき作業（福島県会津若松市の御薬園にて）】

◆作品写真



【「家紋作り」による民家の家紋】

11 ^{たまる ゆうじ}
田丸 雄二 氏 (74歳) 造園工等【田丸造園建設(株) TEL:0949-26-1987】

《名簿番号82》

◆伝統を重んじた、環境に配慮した庭造り

福岡県推薦

卓越した造園技能を有しており、自然との共生や緑豊かな生活環境を創造し、地域社会に貢献している。特に、日本庭園や茶室の作庭において、伝統の作庭・石組みの技能を積極的に取り入れた独特の庭造りは高い評価を得ており、伝統技能継承に貢献している。

また、文化財の保全・保護、災害復旧工事及び後進の指導・育成にも尽力し、造園業界から広く信頼を集めている。

◆秘伝の伝承

造園技能における造形の基礎は、南北朝時代に夢窓疎石(※1)により打ち立てられた。夢窓疎石は西芳寺に瑠璃殿を主殿とした荘厳美を作り、これが金閣寺、銀閣寺の原形となった。夢窓流は天龍寺の庭園に集積し形造られ、現在でも世界遺産として皆に鑑賞されているとおりである。

この系譜は今に続き、秘伝として伝承されている。これが横斜径(※2)である。

氏はこの秘伝の伝承のため、日々研鑽に努めている。

(※1) 鎌倉時代末～室町時代初期にかけての臨済宗の禅僧。世界遺産の西芳寺および天龍寺(いずれも京都府)などの庭園の設計で知られる。

(※2) 立体的な空間構成を重んじる造園技法のこと。おう(ヨコ)・しゃ(ナナメ)・けい(タテ)は、それぞれ造園の基本的な構成要素を指している。

◆作業風景写真



〔伝統技能を継承した築庭〕

◆作品写真



〔茶庭＜小瀧と流れ＞〕

12 さとう ともあき 氏 (58歳) 石彫工【佐藤美術彫刻店 TEL:0296-55-3161】

《名簿番号92》

◆石に息吹を刻む伝統の技術

茨城県推薦

道具の近代化が進む中、今でも昔ながらの道具を使い、先代から受け継いだ技法で石を刻み、40年間にわたり1,000体を超える作品を手掛けてきた。石仏は曲線が多く滑らかさを表現することが難しいが、石が柔らかな布であるかのように仕上げることに卓越した技能を有する。

若くから技能検定の重要性や技能士資格取得に関する普及活動を行うなど、業界への発展に貢献するとともに、地元高校においても技術指導を行うなど、後継者の育成にも尽力している。

◆誠心誠意、お客様の想いを石に彫る

父親の背中を見て育ち、「自分にはこの仕事しかない」と石工の世界に入ったが、「多少ものになるころには10年が過ぎていた」。その後、全国各地の石材産地、石彫の名作があると言われる寺社仏閣を訪れては、様々な石彫からその歴史背景や表現方法を学び、自分にしかできない石彫、他で見たことがないオリジナル性のある石彫を目指すようになり現在に至る。

昭和から平成へと時代が流れる過程で、安価な輸入品が大量に出回り苦労したが、こだわりを持ち、石に想いを残したいと願う顧客の存在に支えられた。「要望に応え、感謝の言葉をいただくことが一番の喜び」と語る。「これからもノミとセツウを持ち続けたい」と、今も石彫に精進している。

◆作業風景写真



〔ノミとセツウによる荒取り作業〕

◆作品写真



〔千葉市の圓福寺にある涅槃像（長さ4m、製作期間2年）〕

13 ^{えんどう きよし}
遠藤 清 氏 (79歳) 木製建具製造工【藤 木工所 TEL:024-944-3283】

《名簿番号96》

◆建具道一筋、65年

福島県推薦

60年以上木製建具製作に従事し、杉・檜などそれぞれの木材が持つ自然色を活かし、色彩のコントラストを引き出した伝統ある「組子細工」の製作、特に「三ツ組手（みつくで）亀甲」の技能に卓越し、優れたデザイン性と技能により、全国建具展示会等で13度の受賞を果たしている。

また、「三ツ組手亀甲」を一般住宅にいち早く取り入れ、付加価値のある製品需要を創り出すとともに、若年技能者への組子の技能伝承に努め、業界の発展向上に多大な貢献をしている。

◆木の心と語り合うものづくり

小さいころからものづくりが好きで、指物大工（建具屋）に弟子入りし、職人が手刻みで造っていた欄間の三ツ組手組分け組子に魅せられた。東京の木工所へ職人として勤め、初めて三ツ組手亀甲を手刻みで造る仕事に携わり、「大きな喜びと共に自信を得たことが思い出」と語る。

当時は高度経済成長期であり、数多くの建具を造り、それが世に流通されていくことに「誇りを持ちながら」日々の仕事に励んだ。

その後、福島に戻り「藤木工所」を設立。現在は長男と共に家業を営んでおり、当人は組子製品造りに専念する日々であるが、「いつも木と語り合い感謝しながら」研鑽に努めている。

◆作業風景写真



【三ツ組手亀甲の手刻み作業】

◆作品写真



【色彩のコントラストを引き出した三ツ組手亀甲の木製建具】

14 おおえ かつゆき 氏 (62歳) 和生菓子製造工【(株) 彩雲堂 TEL:0852-27-2701】

《名簿番号105》

◆和生菓子づくりの伝統技術を守り続ける、技巧と感性を兼ね備えた和菓子職人

島根県推薦

茶の湯文化が息づく城下町松江の和菓子職人として、餡や生地づくりの伝統技術を継承しながら、消費者の嗜好変化に応じた製法改良と創作を重ね、現代の和菓子として発展させている。特に、水の都である松江の自然の移ろいを、繊細な形状や微妙な色合い、季節ごとに異なる口触りの良さや風味などで和菓子の中に具現化する技能は卓越している。

地元菓子研究会を牽引し、全国菓子博で審査委員を務めるなど、技能継承と後進育成にも尽力している。

◆ものづくりの伝統技術の継承と進化

ものづくりと松江の伝統文化に興味を抱き、和菓子老舗の彩雲堂に入社。そこは古くから続く所謂「職人」の世界であった。自身の技術を高めるためには先輩職人の技を「見て」盗むことが当たり前の時代、「販売商品を作った後で製造現場に残り、自己研鑽をする日々が続いた」と修業時代を振り返る。職人としての技術と地位を確立した今でも、お客様の嗜好の変化を敏感に感じ、作る和菓子、自らの技術も進化させている。

「今の自分があるのも松江の菓子文化とそれを守り続けてきた先輩職人のおかげ」と語り、和菓子の文化と、昇華させた手作りの技術を次の世代に継承するべく、後進の育成、菓子教室の開催、新たな和菓子の創作にと日々邁進している。

◆作業風景写真



〔専用の木べらを用いた和生菓子成形〕

◆作品写真



〔工芸菓子「島根の冬」〕

15 やまなか えみこ 氏 (90歳) 美容師【山中美容室 TEL: 075-561-8096】

《名簿番号 1 1 2》

◆嶋原「太夫」の結髪を手掛ける唯一の技能者

京都府推薦

古墳時代から現代の舞妓・芸妓・嶋原太夫まで、各時代の身分、立場の違いによる多種多様な日本髪（日本髪）の結髪、各時代の装束等の知識に係る卓越した技能を有しており、最高位の芸妓である嶋原「太夫」の結髪を手掛ける現存唯一の技能者である。

また、伊勢神宮祭祀において、祭主の元皇族昭和天皇皇女殿下、上皇陛下皇女殿下の結髪・着付け専任を拝命した実績を持つなど、我が国の文化芸術に係る貢献も大きい。

◆研究と努力で「日本髪なら何でも結える美容師」へ

母親をはじめ、家族や周囲の支援もあり、中村 八重先生、南 千恵先生、百々先生といった先人の仕事を間近で見ながら、日本髪（日本髪）の結髪技能の研究に打ち込んできた。太夫の髪を結うことになったきっかけは、ある時、輪違屋（※1）のおかみと花扇太夫から、太夫の髪を結ってほしいと依頼されたのが始まりであり、最初は依頼を断るなど紆余曲折はあったが、花扇太夫がつきっきりで技能指導にあたり、結髪（結髪）の技能を身に着けることができた。

日本には時代や身分により、多種多様な髷（まげ）（※2）が存在する。「元気な間は、皆様とともに研究を続けていきたい」と、日本髪なら何でも結える美容師を目指して、努力、努力の毎日を過ごしている。

（※1）京都の旧花街、島原で現在、唯一営業している置屋兼揚屋。 （※2）髪を束ねたり結ったりして頭頂にかたどった、日本の伝統的髪型のこと。

◆作業風景写真



〔舞妓の結髪〕

◆作品（被写体結髪）写真



〔花供養での桜木太夫結髪〕

16 こんどう ふみお
近藤 文夫 氏 (72歳) 天ぷら料理人【てんぷら 近藤 TEL:03-5568-0923】

《名簿番号120》

◆てんぷらとは油で揚げる事だが、これほど単純で難しい事はない

一般推薦

天ぷら職人として50年以上従事し、素材を活かした天ぷらの仕上げ技能に卓越している。技術追及に余念がなく、蒸し料理の技術と薄い衣を使い、野菜が本来持っている水分、香り及び色を損なうことなく揚げる技術や、魚の身の水分を活かしながら柔らかに仕上げる揚げ方を考案するなど、江戸時代から伝わる揚げ物の技術を、時代に合わせて進化させてきた。

また、日本国内に留まらず、海外においても天ぷらの技術指導を行うなど、業界の発展に尽力している。

◆てんぷらを世界に

6歳の時に父が他界し、「食べる事の大変さを痛感した」。小学生の頃、家でご飯を炊く役目だったが、ご飯をうまく炊くには火加減と水加減がある事がわかり、「母にうまいと言われた時の感動は今も忘れない」と、当時の体験が「天ぷらは蒸物」という天ぷら仕上げの考え方の原点となった。

天ぷら職人となってからは、素材の水分を逃さずに衣で包み揚げる技法や、野菜の色を美しくするために衣を薄くする技法など、素材を活かした仕上げを追求してきた。魚や野菜はひとつひとつの水分量が違うため、揚げる音の変化など「五感を使わないと揚げられない」と、その難しさを語る。

「日本だけでなく世界に発信できる「てんぷら」を作りたい」と、今でも自ら契約農家を飛び回るなど、天ぷらの味を追求し続けている。

◆作業風景写真



〔素材に衣をまとわせる〕

◆作品写真



〔千切りにした人参を用いた天ぷら〕

17 **おの あきお 氏** (77歳) 家具類内張工【グローバル工房 TEL:03-6429-9081】

《名簿番号 1 2 8》

◆椅子張り技能の後継者育成

団体推薦

世界に通用するソファを作るうえで最も大切な椅子張り技法である東土手工法の技能・技術に優れている。エコ活動によりテーブルの天板等貴重な無垢材を使用せず合板に木目をプリントした塩ビシートを張込む日本初のダイノックシート張りの第一人者である。独自の技能と新素材を数多く考案し、惜しげもなく公開するなど業界発展に寄与している。

また、首席技能検定委員を長年務め、講習会等を通じ現在も技能者・後継者の育成にも貢献している。

◆伝統的技能から近代的技能の取り入れ

家業が椅子張り業であったが、修業のため須永製作所の門を叩く。当初2年間は、毎日材料の下準備等に追われ、先輩の教えもなかなか理解できず、「3年目になってようやく分かった様な気がする」と当時の苦労を語る。その後、国立水泳競技場、参議員会館等の内装関係に携わることになるが、「厳しい修業に耐え、技能・技術を身につけたお陰」と感謝する。

須永製作所を退社後、家業を継ぐ。伝統的な技術に加え、近代的な工法を取り入れ、三笠宮邸新築工事等の椅子張りを手掛ける。1957年頃、内装材の新素材として塩ビシートが出始めた際に、いち早く幅広く採用。しかし、材料としてなかなか受入れられず、「苦労・失敗の連続だった」。

それでも1965年頃になり、世間に認められ、ようやく苦労が報われた。

◆作業風景写真



〔1人掛けソファの張込み〕

◆作品写真



〔安楽椅子〕

18 ^{たかはし}高橋 ^{よしや}良八 氏 (76歳) 広告美術工【(有) ライト工芸 TEL:044-811-7181】

《名簿番号 136》

◆プラスチック加工技術における第一人者

神奈川県推薦

広告美術の幅広い技能分野の中でも特にプラスチックの切り抜き[象嵌(ぞうがん)]、曲げ、接着・組み立て等の加工部門において卓越した技能を有している。技能検定に初めて取り入れられたプラスチック仕上げ作業において抜群の成績を収め、技能競技大会一級広告美術仕上げ優秀賞として県知事表彰を受けている。優れたデザインと加工技術は他の模範となっている。

◆経験と工夫で顧客のニーズに応えます

今から60年前、秋田県で木工の勉強をしていたが、「これからはプラスチックの時代が来る」と考えて上京。プラスチックの板加工会社へ入社した。当時、プラスチック看板の加工技術はまだ確立されていなかったため、自ら看板の加工方法を考え、必要な道具も作るなど、まさに「ゼロからのスタートだった」とその苦勞を語る。

26歳で独立。旧国鉄の路線図や時刻表のほか、当時、急速に拡大していた居酒屋チェーンの看板作成等を手掛けるようになる。北海道から沖縄まで飛び回るほどで、多忙な日々を送ったが、「良い時代だった」と当時を懐かしむ。今は道具も機械も様々なものが揃うようになったが、「限られたものを使って工夫できるのは、あの頃があったから」と経験の重みを語る。

現在も第一線で活躍するとともに、(一社)神奈川県広告美術協会の役員等の活動を通して、広告美術業界の発展に尽力している。

◆作業風景写真



[アクリルの細かいカット作業]

◆作品写真



[プラスチック看板(久地ゴルフガーデン Sports Village(川崎市高津区))]

19 ^{むさしかわ}武蔵川 ^{よしのり}義則 氏 (70歳) 漆器加飾工【(有) 武蔵川工房 TEL:0766-26-0792】

《名簿番号 1 4 1》

◆伝統工芸である高岡漆器の「青貝加飾技法」に卓越した技

富山県推薦

伝統工芸である高岡漆器の青貝塗の特異技法「青貝加飾技法」に卓越している。花鳥人物等の細部を緻密に表現する針彫りの技法や貝の裏面に彩色を施す色底螺鈿（しきていらでん）の技法等に優れ、色底螺鈿と途絶えていた高岡錆絵（さびえ）の融合にも取り組み、全国で高評価を得ている。

また、高岡市伝統工芸産業人材養成スクール等の講師を務めるなど、技能の保存継承や後継者育成に尽力するとともに、高岡漆器の振興と発展に貢献している。

◆手仕事を大切にし、漆器の新たな魅力と可能性を未来に繋げていく

明治 43 年創業の工房で、武蔵川家に伝わる青貝塗の技を父である武蔵川建三から修得し、蒔絵、錆絵、沈金等の技術も学ぶ。

青貝塗は、貝の厚みが 0.1 ミリと極薄で、細密な図案を表現できることが特徴である。貝は一つとして同じ輝きがない天然素材であるため、材料の個性を見抜いて適材適所で使うことが大切であり、何より集中力と根気が求められる仕事でもある。「人の手が作るものだから、そこに個性が表れ、同じ図案でも職人が違えば違う味わいになるところが面白い」と語り、貝の細片の色や輝き具合を確かめる。

近年は、異素材であるガラスに螺鈿を加飾して新しい漆器を制作するなど、時代にあった商品づくりに挑んでいる。

「漆器の新たな魅力と可能性を職人の技で際立たせたい」と、伝統を未来へ繋げていくために、日々邁進している。

◆作業風景写真



〔青貝塗工程 貝貼り〕

◆作品写真



〔飾箱 花丸模様 貝入〕

（日本郵便特殊切手「伝統的工芸品シリーズ第 4 集」題材作品）

20 ^{はやふじ ひろふみ}
早藤 博文 氏 (79歳) クリーニング工【ハヤトウクリーニング本店 TEL：075-561-8096】 《名簿番号149》

◆ハンドアイロンによる卓越したシルエットの復元技能

京都府推薦

プレス機に頼らずハンドアイロンを使用し、適度なアイロン熱、噴霧器による水分（湿度）、アイロンを当てる圧力、及びドレスシャツの部位に応じた補助器具の馬（様々な形状の小型のアイロン台）の使い分けに係る総合的な技法を有している。

特に、仕上げの最大の目的の「シワ伸ばし」から美しい「シルエットの復元」（品位・立体・シャープ）に力点を置き、卓越した技能を有している。

◆「習うより慣れろ」の精神

実家がクリーニング業であり、中学卒業と同時に家業に従事することとなった。しかし学業は捨て切れず、夜間高校に進学することを条件に、家業と高校生活の両立を認められ、充実した日々を送ることができた。

15 年程父親の下に従事していたが、当時の業界は、「技術は盗め」方式で、直接に手を取って教えて貰う雰囲気ではなかった。しかし、弟3人も家業を継ぐようになると、年長者として、技術指導や毎日の作業の段取り指示などに積極的な関与が求められるようになった。

クリーニング業はサービス業であるため、「職業柄、お客様の表情なり、顔色を伺う習性が身に付いてしまった」。その一方で、お客様から「きれいになったね、ありがとう」と言われた時の嬉しさについて、「60 年経過した現在でも、自らの業に対する「原点」と語っている。

◆作業風景写真



〔数台の馬（小型のアイロン台）を使い分けながら仕上げを行う様子〕

◆作品写真



〔優美で立体的な仕上げを施されたワイシャツ〕